

民族身分の戦略的利用

—四川省黒水県黒水チベット族の観光開発を事例として—

孫 文

総合研究大学院大学 文化科学研究科 比較文化学専攻

要 旨

2008年「5・12 ^{ウェンツァン}汶川大震災」の発生により、中国四川省の西北部の少数民族地域では甚大な被害を受けた。筆者は2010年から、四川大地震後の復興をテーマとして被災地黒水県のチベット族の調査を始めた。長期間のフィールドワークを通じて、災害の復旧だけではなく、2013年以降の貧困削減計画によって、調査対象の黒水チベット族の日常生活が激しく変化している一方で、彼ら自身の民族意識の表明が顕在化していることが明らかになった。その理由として、経済成長の手段として観光事業が推進され、少数民族文化の資源化が進んでいることが考えられる。しかし政治的には中華民族という国民統合のイデオロギーが強化されているという現実がある。本論文の目的は、このような状況下に、黒水チベット族というチベット族のサブグループが、観光開発を契機に、自身の民族身分をいかに戦略的に用いているかを明らかにすることである。

本研究は、まず中国の少数民族の開発に関する「脱政治化」論とその反論を紹介し、本論文の理論的関心を示す。次に、研究対象としての黒水チベット族の民族的帰属に関する歴史的、文化的特徴について述べ、なぜ黒水チベット族を研究対象にするのかを論じる。そして、現在の観光開発に焦点を移し、黒水チベット族の観光村である羊茸^{ヤンロン}と、黒水県の紅色観光を事例に、黒水チベット族の民族身分の戦略を明らかにする。最後に、黒水チベット族は民族身分を戦略的に利用して、開発に参加する政治的正当性、民族文化の真正性、国家統合のイデオロギーへの参入を確保しようとしていると結論する。

キーワード：観光化、開発、少数民族、民族身分、黒水チベット族

Strategic Use of Ethnic Status: A Case Study of Tourism Development by Heishui Tibetans in Heishui County, Sichuan Province

SUN WEN

Department of Comparative Studies,
School of Cultural and Social Studies,
The Graduate University for Advanced Studies, SOKENDAI

Summary

The May 12 Wenchuan Earthquake in 2008 caused enormous damage in the ethnic minority areas in the northwestern part of China's Sichuan Province. The author started research in 2010 on the Tibetan people in the disaster-affected area of Heishui County with a focus on reconstruction after the Sichuan Earthquake. Through an extensive period of fieldwork, it became clear that in addition to recovery from the disaster, but also a poverty alleviation program implemented since 2013 have resulted in a drastic changes in the daily lives of the Heishui Tibetans, while their own expression of ethnic awareness has become more apparent. One of the reasons for this may be attributable to the promotion of tourism as a means of economic growth, transforming the ethnic minority culture into a resource. At the same time, however, the reality is that the ideology of national unity of the Chinese nation is being strengthened. The purpose of this study is to clarify how the Heishui Tibetans, a sub-group of the Tibetan ethnic group, use their own ethnic status strategically with tourism development as momentum.

The author first introduces the “depoliticization” theory of the development of China's ethnic minorities and its counterarguments to demonstrate the theoretical interest of this paper, followed by a discussion of the historical and cultural context of the complex ethnic affiliations of the Heishui Tibetan people and the basis for focusing the Heishui Tibetans. Shifting the focus to current tourism development, this study then clarifies the strategic use of the ethnic status of the Heishui Tibetan people by referring to case studies of Yangrong, a tourist village, and Red tourism in Heishui County. Finally, the author concludes that the Heishui Tibetan people strategically use their ethnic status to secure political legitimacy so that they can participate in development, demonstrate the authenticity of their ethnic culture, and take part in the ideology of national unity.

Key words: tourism promotion, development, ethnic minorities, ethnic status, Heishui Tibetans

- | | |
|-------------------------------|------------------------|
| 1. はじめに | 3.1 観光開発の推進 |
| 2. 黒水チベット族の「民族」問題 | 3.2 羊茸村の事例 |
| 2.1 「黒水チベット族」を研究対象にする理由 | 4. 観光開発と民族身分の戦略 |
| 2.2 黒水チベット族の言語と民族的アイデンティティの齟齬 | 4.1 「黒水チベット族」としての観光戦略 |
| 3. 黒水県における観光開発 | 4.2 「国民統合」としての黒水県の紅色観光 |
| | 5. 結論 |

1. はじめに

2021年、中国共産党が創立100周年を迎えた際に、国家主席習近平は、2011年に認定された農村貧困人口¹⁾ 9,899万人が全て貧困から脱却し、「貧困県」「貧困村」と認定された832県、12万8,000村も全て貧困リストから除外され、地域的な貧困解決と絶対的貧困の撲滅が実現し、貧困削減史上の奇跡が生じたと評価した。とはいえ少数民族地域の貧困の解決は、単なる経済的な問題ではなく政治的な課題でもあり、慎重な検討が必要である。中国の五つの少数民族自治区と西部の少数民族地域は、貧困の深刻度が高い一方で、多様な自然資源と文化資源に恵まれている。そして辺疆としての少数民族地域では、独立の試み、宗教問題、周辺国家との領土問題など政治的に敏感な問題が多く、常に国際的な関心を集めてきた。つまり少数民族地域の開発は、国内の平穏と国際的なイメージの維持という二重の意味を持っている。

貧困削減のための経済政策が実施される一方で、2012年の中国共産党の18回全国代表大会以降、少数民族の政策も変化している。2014年9月に、習近平は「中央民族工作会議」で「中華民族共同体意識を積極的に培う」というスローガンを提出した。2017年10月の中国共産党の19回全国代表大会では「中華民族共同体意識をしっかり築く」と報告に記入された²⁾。こうした変化は、少数民族を中華民族の国家に統合することを意味し、個々の少数民族の政治的独自性を軽

視するものである。この少数民族の国民統合の問題について馬戎（馬 2004: 132, 2012: 12）は、経済発展に伴って少数民族の中に芽生える独立の関心を防ぐことは国家発展のために必要であると説き、民族の「脱政治化」論を主張する。少数民族の問題に関して「民族」という政治的意味の強い言葉を使うよりも、中華民族を構成する「エスニックグループ」といった方が、中国の現状に適合しているという考え方である。馬戎の民族の「脱政治化」論に対して、張海洋は、少数民族の民族身分は憲法と少数民族区域自治法によって保障されている公平な開発を手にするための最低条件であると説き、重要なのは少数民族区域自治法が確実に実施できるかどうかであると主張する（張 2011: 17-19）。

少数民族の「脱政治化」論の影響下、政治学者の胡鞍鋼と胡聯合が提唱した「第二代民族政策」は、エスニシティと民族アイデンティティを弱化し、国家アイデンティティと中華民族一体化を強調するものである（胡鞍鋼、胡聯合 2011: 1-12）。これに対し前述の張海洋の反論を契機として、中国社会科学院の郝時遠は、次々に四篇の論文を発表し、中国少数民族政策の歴史と法的現実を無視してはならないと述べ、少数民族の脱政治化と「第二代民族政策」を批判した（郝 2012a: 44-62, 2012b: 1-15, 2012c: 1-11, 2012d: 1-12）。2014年に米国のウイグル族の研究者Gardner Bovingdonは上記の論争を分析した。彼は、馬に代表される欧米への留学経験を有す

る中国人学者たちは民族は構築されるという立場から、中国の現行の民族政策によって少数民族の融和がはかれると想定しているが、実際はその逆で、民族の差異が強化されていると指摘した (Bovingdon 2014: 165–192)。

当時の中国学界の様子を見れば、馬の脱政治化への反論が優勢を占めていたが、現実に戻ると、むしろ馬のような論説を現在の中国共産党は確実に実行していると思われる。そして近年の中国の民族政策や民族問題の学術研究の動向も「中華民族共同体」が中心である。「民族認同」(民族アイデンティティ) という漢字で中国の論文検索サイトである「CNKI (中国知網)」を検索すると、殆どが中華民族アイデンティティや国民アイデンティティに関する研究であり、個々の少数民族のアイデンティティや民族意識に関する研究は少ない。言わば今の中国の少数民族研究の現実は、学術的に脱政治化されている。故に、現在の中国における少数民族の「政治化」問題の回避は、中華民族という民族アイデンティティの政治化に他ならず、それは少数民族地域の開発の重要な局面を無視することでもあると思われる。

上記の論争は、国家の側が少数民族をどのように扱うかを論じるものだが、少数民族の側からは、開発を指向する際に少数民族であることをどのように扱うかという問題につながる。自身の存在を「脱政治化」して中華民族の一員として国家の開発の恩恵を受けるか、「脱政治化」に抵抗し少数民族としての開発を進めるかという選択が存在する。そこで本論では、チベット族のサブグループとしての「黒水人」に焦点をあて、彼らが観光開発に際して「黒水チベット族」としての自己認識を形成してきた過程を明らかにしたい。その際に重要なのは、中国政府の民族識別によって確定された「民族身分」という概念である。これは、単なる民族意識のような主観的なアイデンティティではなく、中国政府の民族識別³⁾によって確定された客観的な民族

分類のことを指す。「黒水チベット族」という「民族身分」の主張は、彼らの民族的独自性の表明としてだけでなく、中華人民共和国の国民としてのアイデンティティ構築という点からも検討する必要がある。そしてこの「黒水チベット族」の形成過程においては、中国政府と州政府の開発政策という外部の力のみならず、学術的言説の影響、周囲の民族との関係、地元エリートの主張と実践など、黒水人社会の内的な諸問題が関係している。こうした複雑な状況下に個々の黒水人は、どのような判断にもとづいて「黒水チベット族」を選択したのだろうか。その選択は、国家の少数民族政策を自分たちにとって有利なものに変えていくという意味で戦略性をもっているものであり、本論の中心的な課題は、このような「民族身分」にまつわる黒水チベット族の戦略を明らかにすることである。

なお本論で「民族身分」を重視する理由は、①「民族身分」が前述の「脱政治化」の動きに対抗して少数民族が公平さを求める最低限の法的な根拠となること、②客観的な民族分類といわれる「民族身分」が歴史的、文化的に育まれてきた地元の人々の民族意識と完全に一致するわけではないこと、③①の性質により「民族身分」は政治的に活用可能であること、④②と③の性質により「民族身分」は複雑性と変動性をもつことである。この結果、「民族身分」は中国の少数民族を理解する一つの鍵であると考えられる。

2. 黒水チベット族の「民族」問題

2.1 「黒水チベット族」を研究対象にする理由

2020年の第7回中国人口調査によると、中国に住んでいるチベット族は7,060,731人である (中国国家統計局 2021)。チベット族は、主に西藏チベット族自治区、青海省、四川省、甘肅省、雲南省などに分布している。チベット語の方言からは、ウツァンチベット語 (西藏)、アムドチベット語 (西藏北部、青海省、四川省)、カムチベット語 (西藏東部、四川省、雲南省) という

三つの主要なサブグループに分かれている。ウツァンチベット語を話す西藏のチベット族と区別するために、「アムドチベット族」、「カムチベット族」という呼び方がある。そして三つのサブグループは異なる自然環境の下、独自の生業に従事している。ウツァンチベット族は主にラサ（拉薩）とシガツェ（日喀則）の平坦な河谷で農耕に従事している。アムドチベット族は主に草地での放牧に従事しており、青海省東南の一部では農耕もみられる。カムチベット族は青海-チベット高原の東縁の高山と河谷で農耕と放牧の混合生業に従事している。チベット語群の上記の三サブグループ以外にも、チベット族のサブグループ（主に四川省に分布している）が存在する。しかし言語学的な複雑性に加え、人口が少ないため、主流のチベット族研究においては研究蓄積が少ない。その一つである羌語群^{チャン}ではそのサブグループは「〇〇人」と呼ばれ、本研究で取扱う「黒水人」もその例である。しかし黒水人はあえて「黒水チベット族」と自称する。本研究でその理由を考えることは、「族」の政治性を強調しつつ「民族」の意味を再考することに他ならない。以下本文では「黒水チベット族」と表記する。

本研究の対象である「黒水チベット族」は、四川省阿壩チベット族羌族自治州黒水県に住んでいるチベット族のサブグループである。1956年の少数民族地域の国勢調査において、その言語を羌語北部方言と分類された黒水人は、当初羌族とされ、羌族の調査資料に記入された（西南民族大学西南民族研究院2008）。ところが、1950年代から1960年代までの「民族識別」の際に、地元の領袖としての土司⁴⁾は、黒水県に住んでいる人びとをチベット族と称することを主張した。少数民族の意思を尊重するために、土司たちの証言を参考にして、羌語北部方言を使う黒水県の人々はチベット族と認定されたのである（黒水県地方志編纂委員会1993）。

1949年10月1日に中華人民共和国が成立し、東

北と内蒙古を除く大部分の少数民族地域が再び中国国民党の統治下に入った。1952年に黒水県は中国大陆で最後に解放された地方として、「陸上台湾」と称されている。1956年に黒水の少数民族リーダーは共産党の幹部を殺害する反乱を行った。その反乱終息まで台湾に敗退した国民党の蒋介石集団も黒水県に軍事物資を空中投下しており、中国西南部を反攻根拠と見なしていた（郭1992）。こうした歴史的要因から、黒水県はチベット族地域の中では独特の政治性を持っており、中華人民共和国以降の人類学や他の社会科学による研究は極めて少ない。既存の正式な研究は、わずかに中華民国期（1943年）の蔣旨昂の一篇（「黒水社区政治」1943）と于世玉の三篇（「麻窩衙門」「黒水旅行記事」「黒水民風」1944）の論文、1956年の「少数民族社会歴史調査」（少数民族状況の国勢調査）という調査報告があるだけである。日本の学者、松岡正子は、長期にわたり四川省、雲南省のチベット系と羌語群系民族の研究に携わっている。松岡は2017年に出版した『青藏高原東部のチャン族とチベット族—2008汶川地震後の再建と開発』という本の中で、黒水チベット族をこの本の前半の羌族の部分に分類しているものの、複数の民族集団の間に位置する黒水チベット族のエスニシティの特殊性とその研究意義を指摘した（松岡2017）。

研究蓄積が極めて少ない一方で、黒水人・黒水チベット族は、四川省西北部の少数民族研究と「藏羌彝走廊」⁵⁾研究において避けて通れない混合民族集団とも言える。地理的に、黒水県は阿壩チベット族羌族自治州の中央部に位置する（図1）。南北方向を見ると、アムドチベット族の放牧区（図2の1）とギャロンチベット族⁶⁾の農耕区（図2の3）との狭間に位置し、東西方向を見ると、有史以来チベット族地域の最東縁で、東南部で羌族と漢族に隣接している。言語学の分類によれば（図2）、羌語北部方言を話す黒水チベット族は、チベット族のチベット語群

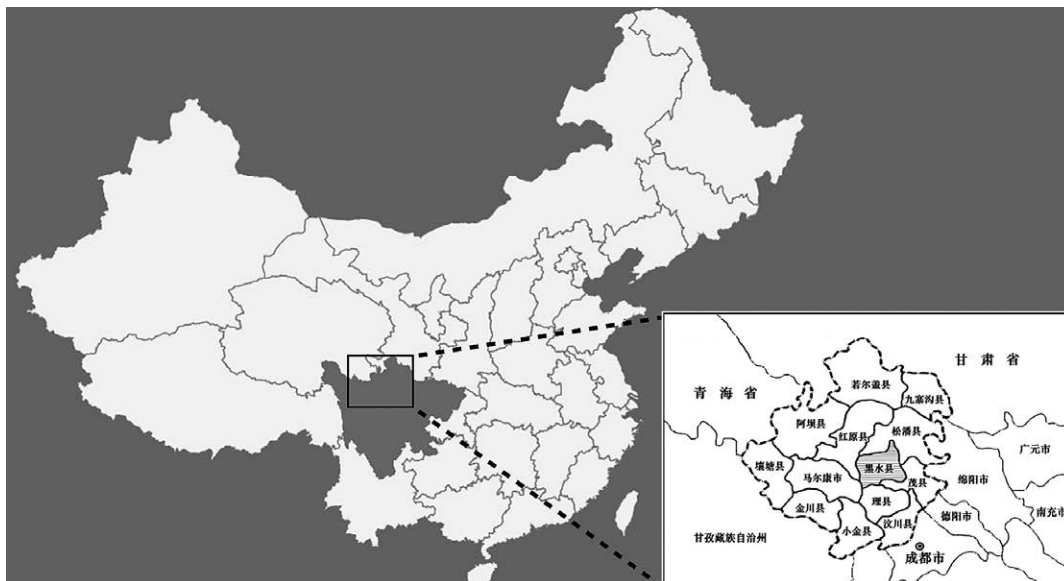


図1 黒水県の位置（筆者作成）

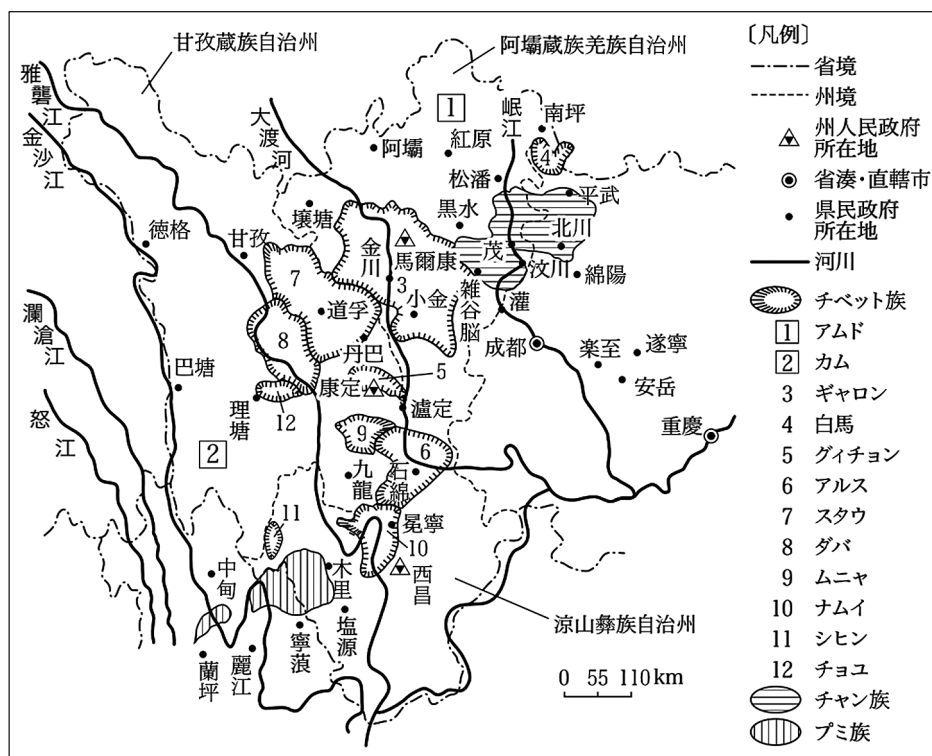


図2 四川省のチベット族の分布（松岡 2000: 239, 2015: 169）

と羌語群という二つ言語集団の移行帯である。
羌族研究あるいは羌語研究を参照して黒水チベット族の研究を行うことには注意が必要である。過去の研究者は、黒水に至るため地理的にほぼ岷江の下流から黒水川まで遡上し「漢族-羌族-

黒水チベット族」という集団に出会っていたはずである。研究蓄積の多い漢語文献と羌族資料を用いて、羌族研究の先入観を持ちながら、黒水チベット族を理解しようとした可能性がある。

黒水チベット族が近年の学術研究の視野に

入ってくるのは、台湾の学者、王明珂の『羌在漢藏之間』という本の人気が関係している。その中では、黒水チベット族は「羌語を話すチベット族」と認識されているが、結果的に「不羌不藏」（羌族でもチベット族でもない）と分析されていた（王 2008: 31-76）。その噂が黒水県に流入するに伴い、黒水県の地元エリートの反発を招いた。特に黒水チベット族の話す言語が「羌語」であるという学術的分類は認め難かった。彼らは黒水チベット族を羌族研究に含められたことに大きな異議を唱えていた⁷⁾。このような議論がなされる一方で、2008年の「汶川大震災」において羌族が主要な被災者として全国の関心を集めるに至り、黒水チベット族の反論は学術の視野から消えてしまったのかもしれない。こうした言語学的分類と民族的アイデンティティの齟齬は、黒水チベット族の文化的混合性を表す重要な特徴と思われる。黒水チベット族の事例と類似するのは、四川省涼山彝族自治州のアルスー人（図2の6）である。彼らの民族的な帰属意識はチベット族であり、言語は羌語群に分類されている。しかし居住地が現在の「羌族」居住地から遠いため、言語学的分類への違和感も強い。そのためアルスー人は隣接している彝族であるか、チベット族のサブグループであるか、独自の民族であるかといった議論がなされている（巫達 2005）。地元の人々の学術研究に対する反論は、近年の観光開発において黒水チベット族が独自の民族身分を創出する原因の一つと考えられる。

筆者は、2010年1月から3月までと2010年7月か

ら8月まで、黒水県で2回の言語調査を実施し、黒水県における三つの方言の資料を収集整理した。その後、修士論文の調査のために、2014年7月から12月まで黒水県に滞在した。博士論文の資料収集として、2019年6月から7月末まで、2020年6月末から2021年2月まで、2021年11月から2022年1月初旬まで、計3回、黒水県で全13ヵ月の現地調査を行った。長年の黒水県における調査を通じて、黒水チベット族の民族身分に関する資料を集めてきた。

2.2 黒水チベット族の言語と民族的アイデンティティの齟齬

前述したように、黒水チベット族には、言語学上の分類と民族的アイデンティティの齟齬がある。そしてその認識は、当初、地域の文化に関心をもつ地元のエリートの範囲に限られていた。一般の人は、学術的な言語分類には無関心である。しかし彼らは、隣接する羌族やギャロンチベット族が用いる言語との間で相互に差異があることを日常的なコミュニケーションを通じて経験的に知っている。黒水チベット族にとって、羌族とギャロンチベット族はいわば自己を見つめる「鏡」なのである。

表1のように、黒水チベット族は、下流に住んでいる羌族に対して、スクニ[skuny]、タマ[tama]、ジェジブ[zɛdzibu]という三つの呼び方（他称）をする。スクニは茂県に住んでいる羌族を指す。タマはギャロンチベット語からの外来語であり、ギャロンチベット語で「騎兵」の意味である。唐の時代から吐蕃（チベット族の漢語の旧称）

表1 黒水チベット族、羌族、ギャロンチベット族の自称と他称

	自称	羌族からの他称	ギャロンチベット族からの他称	黒水チベット族からの他称
黒水チベット族	əma, ɣmæ	spæ, zɛsubu	tɕodzibu	
羌族	əma		tama	skuny, tama, zɛdzibu
ギャロンチベット族	kuzu	tɕbɜ		tɕbɜ

（出典：筆者の現地調査による。国際音声記号で表記）

が漢族地域へ東向きに拡張戦争をしてきたことと関わっていると考えられる。ジェジブは、「下流に住んでいる人間」を指す。

これらに対して、茂県の羌族は、黒水チベット族をジェスブ[zɜ̃subu]（上流に住んでいる人間）と呼んでいる他、スペ[spæ]というアムドチベット語話者であるチベット族を指す言葉で呼んでいる。ギャロンチベット族による黒水チベット族への他称は、チョジブ[tʂɔdzibu]で、黒水川に住んでいる人間という意味である。チョジ[tʂɔdzi]は、チベット語における黒水川の名前で、漢字で「措曲」^{ツォチ}⁸⁾と表記される。ブ[bu]はチベット語で男子や人間を指す接尾辞である。黒水チベット族が話す言語は、これに類似するチベット語からの外来語がよく見られる。黒水チベット族は出身地がチベットのシャンシオン（象雄）地域であるとしばしば主張し、現在のチベット族よりも古いチベット族と認識している。

現在の羌族が独自の民族的地位を獲得する以前には、黒水チベット族は「羌族」という言葉を認知することなく、住むところが違う人間とだけ理解していた。「羌族」の公的認定により、一般の黒水チベット族の民衆は、下流に住んでいる同じ自称エマ[əma]を用いる羌族に対しての明確な差異を認めたが、これは民族識別による現代国家の「民族」の概念の影響によるものである。漢語で思考するために区別が生じたということもできる。1949年以前には、交通と教育の制限により、大部分の黒水チベット族が想像できた羌族の居住地域は、わずかに黒水県に隣接する少数の村であったと考えられる。それはせいぜい県境を挟んだ範囲の人的交流で、集団間のコミュニケーションが現在のような範囲に広がることは決してなかった。ジェジブ（上流に住んでいる人間）とジェスブ（下流に住んでいる人間）という概括的言葉で区別していれば十分だったのである。今では、黒水チベット族は「羌族」という言葉を聞くと茂県の隣接地域の人間を想起するが、実はこれらの地域に住ん

でいる羌族と文化の類似性が最も高い。羌族との区別を問われると、彼らは常に「民族は違いますが、言語が通じます。そして、我々はチベット仏教を信仰していますが、彼らの生活習慣も大体同じかもしれません」と返答する。ギャロンチベット族との区別については、「民族と宗教は一緒ですが、言語が全然通じません。」と答える。

こうした状況は、2008年の「汶川大震災」以降次第に変化していった。震災の主要な被災地である羌族地域は、全国から支援を受け、また学術界から現地の政府まで、震災による羌族文化消滅の危機感を抱いていた。震災後に人びとの日常生活や経済が復旧するにつれ、羌族文化の保護と復興が推進された。学術面においては羌族文化への関心が高まり、「羌族文化博物館」、「中国古羌城」、羌族文化村落、羌族無形文化財などさまざまな文化観光プロジェクトと投資が増えてきた。同時に、黒水県は四川省政府が主催する「羌族文化保護区」に組み込まれた（「阿壩州全域旅行発展規劃」2013）。ところが、これらの羌族文化の観光プロジェクトが実施される一方で、いわゆる伝統的な羌族文化を保っているのは、わずかに黒水県に隣接している茂県の幾つかの郷鎮に住む人々だけである。この状況に対して、同様に観光開発を通して震災からの復興を志向していた黒水県政府は、黒水チベット族の文化は羌族文化とは異なるという立場を堅持する。そして、茂県、汶川、理県という羌語がほとんど話されていない観光地で提示されている羌族文化が黒水チベット族の文化を模倣したものだと疑っているが、その証拠は示せない状況にある。羌族地域における観光事業が先行したために、黒水チベット族と羌族の類似した文化資源がどちらに帰属するかという問題は黒水県政府の一方的な主張で解決することは難しい。

民族識別にかかわらず、黒水チベット族は、自分達がチベット族である理由はギャロン^{ソモ}梭磨

土司⁹⁾の正統であるからだと信じている。さらに黒水チベット族は、自らがまずギャロンチベット族とアムドチベット族に属していないという事実を知っているが、言語学上、羌語北部方言を話している自身が羌族と誤解され易く、民族学上は自分自身に関する明確な定義を持ち合わせていない。しかたなく自分を「黒水人」と呼んではいるが、それでは自分達のチベット族への帰属が想起されないことになる。こうした背景から、黒水チベット族のエリートが民族文化観光を通して、自分たちの民族身分を創出するためにどのような戦略を取っているのかを次に述べる。

3. 黒水県における観光開発

3.1 観光開発の推進

1980年代から、経済発展に舵を切った中国政府は、鄧小平の「黒猫白猫論」¹⁰⁾により、観光の経済効果に期待した。例えば、黒水県が位置する阿壩チベット族羌族自治州では、水力発電産業と森林伐採以外は主要な産業がなかったが、観光地としての自然観光資源と少数民族文化が豊富である。世界自然遺産に登録された九寨溝・黄龍とパンダの生息地である臥龍が世界的に有名な観光地になったことにより、道路、通信やホテルなどの整備が進み、地域住民の生活も一段と向上していった。震災前の2007年まで、阿壩自治州の観光産業は地方GDPの70.76パーセントを占めていた（阿壩自治州観光局 2013）。その資本蓄積効果は顕著であり、各レベルの地方政府が観光を地域開発の柱とする訳が分かる。また2008年の大震災の震災復興計画により、2012年までには基本的に震災前の生活が復旧した。2013年の「阿壩自治州十二・五観光計画」¹¹⁾では、阿壩自治州は観光産業を「二回目起業」と呼び、震災後全国から集まった膨大な支援と投資を用いて、被災した観光インフラの整備と既存の観光名所の復旧のみならず、過去の九寨溝・黄龍を観光の中心にしたモデルから新たな

自然観光地の開発、文化観光と体験観光への転換、後述する紅色観光の推進などを開発政策の中心に据えている。

黒水県の観光開発は、四川省や阿壩自治州の他の少数民族地域と比べると、後手にまわっていた。政治的な理由からとられていた閉鎖措置が解除された後も、宣伝不足のために、唯一の観光地であった達古氷河は基本的に未開発の状態であり、観光客と観光業の進捗が遅かった。筆者が2009年末に初めて黒水県を現地調査した際、黒水県の県政府所在地蘆花鎮には3軒のホテルしかなかったが、2020年の現地調査の時点では、全県に157の民宿を含む200軒以上のホテルに増加した（2021年黒水観光局の統計による）。上記の計画の推進により、2021年末の現地調査では、黒水県に表2のような各種類の観光地が整備されていることがわかった。

黒水県の観光産業では、最初に「ピンツァンツァイリン氷川彩林」（氷河と多彩な森）を宣伝スローガンにして、達古氷河と雅克夏国家森林公园を中心とする開発が展開された。2008年の震災後、中国の人びとの間で被災地への同情が高まり、阿壩自治州が多くの支援を受けたことにより、被災した観光地はマスコミによって頻繁に報道された。州外の観光客に特別な割引を与える措置により2013年からは阿壩自治州の観光産業が再起していった。黒水県もこの観光ブームに乗って、観光産業は大いに発展した。2008年以前は1億元に満たなかった観光収入が、2021年になると15.6億元になったのである。特に達古氷河が2018年に中国の人気映画『中国機長』の撮影地になったため、黒水県への観光客が爆発的に増加し、2019年には約400万人にもものぼった（黒水県人民政府 2020）。コロナ・ウイルスの影響下にあった2021年でも295万人の観光客を受け入れた（黒水県人民政府 2022）。

自然観光の人気と収入に対して、黒水県で最初に開発された色爾古藏寨は、古い黒水チベット族の建築群を完璧に保存したものであったが、

表2 黒水県の観光地（2021年時点）

観光地	類型	開発時間	入場料
ヤケシャ 雅克夏国家森林公园	自然観光	2003年指定	370元（ロープウエー料、観光車料込み）
ダク 達古水河		2003年保護区指定 2006年開発審査通過	無料
カロンゴウ 卡龍溝		2013年	夏秋60元/冬春40元
スエグ 色爾古藏寨	少数民族文化	2013年	30元
ヤンロン 羊茸藏寨		2015年	無料
アウタイジ 奥太基雪山登山基地	運動、自然	2020年	無料
ルファ 蘆花会議旧址	歴史、民族団結と 愛国主義教育	2006年全国重点文物指定、 2010年	無料

（出典：筆者作成）

県政府所在地から距離が遠く、入場料が必要なので、観光客にとって費用対効果が低い観光地である。色爾古村の村民たちは出稼ぎの比率が高く、村の常住人口が少ないために、観光事業は順調ではない。色爾古藏寨という観光地は政府の支援によって存在しているものの、多くの村民たちには政府の主導する観光業は自分とは関係がないと考えている。

これに対し、住民主体で取り組んだ観光開発では著しい成果を上げた例がある。震災後の集落移転を契機に伝統的な生業に替わって新たに文化観光を開始した羊茸村（表2の羊茸藏寨）の事例である。

3.2 羊茸村の事例

現在、黒水県で最も人気のある民族文化観光村である羊茸村は、黒水県の西部に位置し、県政府所在地蘆花鎮から16kmの場所にある（図3）。羊茸という地名は、「シャンション」（象雄）¹² という唐の時代以前に西チベット高原に存在した王国の黒水話¹³ の漢字表記である。村人の話によると、黒水チベット族はその昔、シャンション王国の住人だったという。「羊茸」という名前

は、黒水へ移住した際に名乗ったことに始まるという。2021年の調査によれば、全村は45世帯総計196人である。村人全員の民族身分はチベット族で、話す言語は黒水話（羌語北部方言）と漢語北部方言四川弁である。

まず観光開発前の羊茸村の生業を簡単に説明し、いわゆる黒水チベット族の伝統的な生活を紹介する。

2008年「汶川大震災」の被災地である羊茸村高山部の災害リスクに対処するために、政府は震災復興の「易地扶貧計画」（貧困削減のための全面的な移住）を推進した。これに伴い2012年から村人全員が、標高約3000mの高山部から2500mほど下の河谷に移住した。黒水県全域は高原峡谷の地形で、平均標高は3,544m、黒水川に沿って西から東へと徐々に低くなっている。震災前に、県民たちはほぼ高山部で半農半牧の生活を送っていた。わずかに県政府所在地の蘆花鎮のみが河谷の平地に位置していたにすぎない。黒水県の地形は河谷の平地は平坦であるが、山の標高が高すぎるために、河谷の日差しは不十分である。一般的には2700mから3000mまでが緩やかな山地で耕地が存在し、3200m以上の

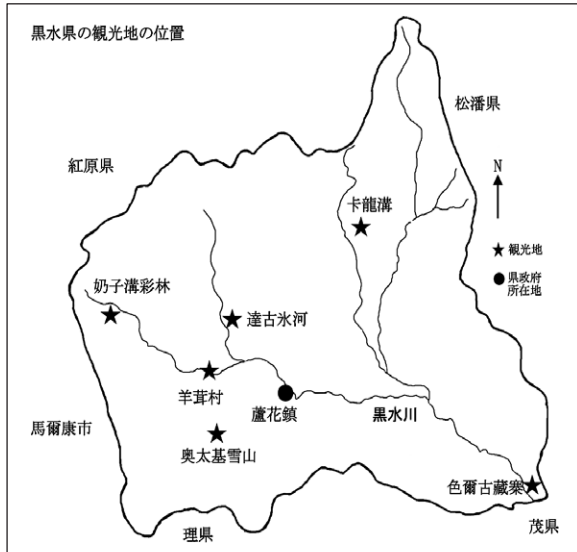


図3 黒水県の観光地の位置 (筆者作図)

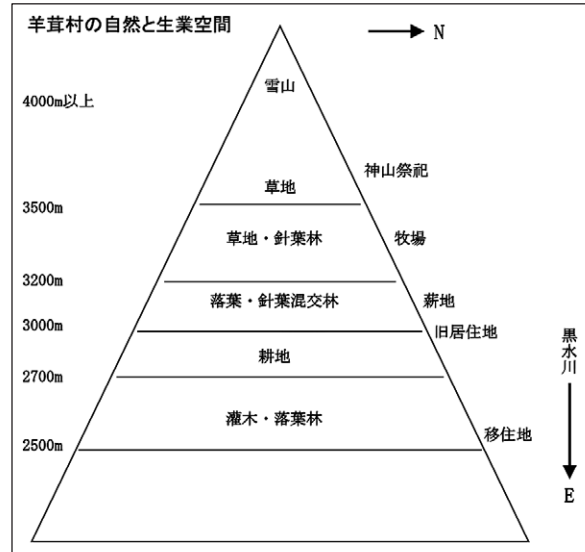


図4 羊茸村の自然と生業空間 (筆者作図)

草地は牧畜のために利用可能である (図4)。

移住以前の羊茸村の農耕の主作物は、小麦および「青稞 (チンクー) 麦」であった。食用には小麦、酒造用には小麦とチンクー麦が使われた。改革開放以降、当地で産出した小麦とチンクー麦は、主に^{ザージュウ}「^{ザージュウ}酒¹⁴⁾」に使用されていた。年中行事や冠婚葬祭の儀礼及び酒造用の小麦とチンクー麦はよく使われ、常に不足していた。主食としての小麦粉は市場で貨幣で買うこともあった。雑穀ではトウモロコシと蕎麦、他にジャガイモ、ソラマメ、青豆などを少し栽培することがあった。野菜では^{イエンゲン}「^{イエンゲン}根¹⁴⁾」(カブの一種)、唐辛子、ニンニクなどの耐寒性のある野菜しか栽培していなかった。なかでも円根は、高山の寒さと乾燥した気候に耐える生産性が高い野菜なので、過去の黒水チベット族にとって最も重要な野菜であった。円根は「^{サンサイ}酸¹⁴⁾菜」という漬け物になり、黒水チベット族の日常飲食で非常に好まれる。河谷に移住した後は穀物の栽培をやめたが、敷地内の庭でキャベツ、白菜、ニンジン、ステムレタスなどの野菜を栽培している。河谷では栽培しない穀物と円根などは、現在は全て市場で購入することになった。

移住する前の羊茸村民にとって、豚の飼育は

重要であった。豚肉を食料として利用する一方、燻製した「^{ジュウビョウ}猪¹⁴⁾膘」(豚背脂)は冠婚葬祭の儀礼用品であった。高山部における伝統的な家屋の構造から見ると、家屋の内部は、一階が豚舎、二階が居住部分、三階が屋上の神山への祭祀塔¹⁵⁾になっていた。「豚-人-神」という三つのレベルの伝統的な住居形態は、黒水チベット族と隣の羌族、ギャロン・チベット族の間で共通の文化的特徴と言える (李 2012)。河谷の新たな住居では、豚の飼育をやめたことにより豚舎はなくなったが、屋上の祭祀塔はまだ維持されている。

高山部での草地放牧では主にヤクとヒツジの2種類の家畜が飼育されていた。^{スウユ}酥油 (バター) を取り、犁耕に必要なので、各家は少なくとも一頭以上のヤクを飼育していた。ヤクの放牧は村全体で集団形式で行われ、毎年村の家々では籤引きによって一人の牧夫を決めた。牧夫は村全体の百頭以上のヤクを、五月から十月まで草地で放牧していた。ヤクの毛から毛糸を紡ぎ、布を織ってチベット式の服を作ることは、黒水チベット族の既婚女性の特技であったという。ヒツジの毛皮は、昔はムートン服の材料とされたが、ヒツジの飼育はそう簡単ではなかった。ヒツジの放牧は、世帯ごとに毎日朝から夕方ま

で家と草地を往復した。山頂に放牧のための出造小屋を建て、牧夫の生活物資を提供していた。過去には家畜の盗難が多かったため、放牧期に牧夫が必ず山頂の放牧地に住んだ。家々から穀物と「猪膘」を集めて、牧夫の報酬にしていたが、改革開放以降にその報酬は現金になった。河谷への移住後、自給用の牧畜は放棄されたが、今でも二世帯だけが収入目的の牧畜を行っている。

黒水県は生薬の資源が豊富で、特に羌活、貝母、冬虫夏草などの貴重な生薬を産出している。黒水県の改革開放以前、黒水県東部の羌族・漢族の地域に近い村では、農閑期に羌族・漢族の市場へ採集した生薬を販売しに行くことが珍しくなかった。特にマスコミの宣伝で冬虫夏草の価格が高騰するに従い、放牧の際に行っていた採集活動は専門的な生業になっていった。需要の増加に伴い、黒水チベット族が四川省と青海省の草地チベット地域へ出かけ、草地の牧民に賃金を払って草場で冬虫夏草を採集させることもあった。生薬と冬虫夏草の収穫は、植物の成長に従うため、季節的な出稼ぎとみなすこともできる。また、アムドチベット地方の家屋建築業に従事する人々も季節的な労働者に当たる。清（同治）の時代の『理番序誌』（1866）には「雜梭諸番男婦、於三冬進口赴蜀西各郡傭工、調之下壩做活路、不獨威茂熟番然也、凡加堰淘井造屋築牆諸色、皆善力作」（黒水チベット族は冬の農閑期に四川省西部の各郡県へ家屋建築の出稼ぎに従事していた）という記録があり（辺政設計委員 1940: 491）、黒水チベット族が歴史的に出稼ぎを行ってきたことがわかる。かつてアムド地方のチベット族が草原で遊牧していた頃、秋冬の定住期に居住地に戻り、家屋の建築に従事した。近年、草原を保護するための「定着牧畜」政策の施行により、政府が牧民に新たな定住家屋を提供したので、このような出稼ぎの機会は減っているが、それに代わってアムド地方の都市部での建築業への就労が増加している。

以上の内容は、羊茸村の人々が河谷に移住す

る前に見られた伝統的な生業の様子である。しかし改革開放以降、経済活動の発展と現金消費の増加に伴い、半農半牧の生業から日常生活の費用をまかなうことは困難になった。このため羊茸村の人々は県外への出稼ぎを徐々に増やしていった。主に都市部で生薬を売ったり、冬虫夏草の採集と販売を行ったり、あるいはアムドチベット族地方で家屋建築業をしたりといった三つの形での出稼ぎである。

羊茸村の観光業は、最初から村民たちによって着手された。2012年河谷の平地に移住した羊茸村民は、基本的に高山部の半農半牧をやめて出稼ぎを主な収入源としていた。当時四川省外で生薬の小売り業に従事していた三郎俄木（40代、調査時の羊茸村書記）は、故郷の様子と外部との経済的格差を意識し、どうすれば地元で稼げるのかと考えていた。この間、達古氷河の観光業は徐々に発展し、蘆花鎮にホテルも増えてきた。羊茸村が達古氷河に近く、且つ河谷の道路側にあるため、三郎俄木は民宿を営むことを考えたという。2013年から2014年まで、三郎俄木を始めとする幾つかの世帯は、家屋をチベット式の内装に改造し、民宿として接客を始めた。観光客が増えたことにより他の村民も自分の家屋を改造し、2015年までに村全体で年間数千人の観光客を迎えるまでになった。羊茸村の民宿は単に観光客を泊めるだけではなく、黒水チベット族の特色ある飲食も提供する。ネット予約の評判がよくなったこととともに、黒水県政府も羊茸村の民宿経営に関心を寄せ、羊茸村が黒水県の民族文化観光の一つの看板になるか検討した。2015年からは黒水県政府が羊茸村の観光を開発計画に取り込むようになり、公的な開発経費で羊茸村内部の道路が整備され、村の外観もチベット式に飾られた。さらに外部の観光会社と契約し、黒水チベット族文化観光の看板としてマスコミで宣伝した¹⁶⁾。この間、黒水県観光のスローガンは過去の「ピンツァンツァイリン氷川彩林」（単なる自然観光の強調）から「ドーサイヘイスイ多彩黒水」（自然風



写真1 高山部の羊茸村（筆者撮影 2020年8月）



写真2 河谷の羊茸村（沢旺撮影 2020年10月）

景の多彩及び民族文化の多様を意味する)になった。こうした政府の投資により、ますます民宿を経営する世帯が増えてきた。

2021年末の筆者による現地調査時には、羊茸村の全45世帯の中で38世帯が民宿を経営しており、全村では240部屋、総計420ベッドが提供されている。民宿だけではなく、黒水県観光の現地ガイド、地元レストラン、土産店、黒水チベット族文化体験（民族衣装の試着レンタル、無形文化財見学、季節的な祭り¹⁷⁾）などの観光サービスが提供されている。現在、羊茸村の観光事業の経営体制は、村の共産党支部、観光会社、村民の三者からなる共同経営となっている。村の共産党支部は上級政府の政策を遵守し政治的な問題に対処し、観光会社は外部から専門家を雇用して観光事業の経営・管理・宣伝を担当する。村民は株主として、各自の民宿を基盤に経営参加している。羊茸村の観光事業は、当初の個人経営から政府介入による集团的経営へと変化した。

2021年村民委員会の統計によれば、羊茸村の年間の観光収入は458万元になり、他の収入と加え、全村196人の一人当たりの平均収入は24,420元である。その値は2021年全国農村平均収入の18,931元を上回っている。羊茸村の観光産業は、政府の介入はあったものの、政府主導の色爾古村の観光とは異なり、主に村民の自助努力で発

展してきた。羊茸村の経済効果により、四川省のテレビ局から国家のテレビ局まで羊茸村に注目し、羊茸村の村民が観光によって黒水チベット族文化を発展させ、貧困脱出に成功したという物語を伝えた。

さらに、SNSの発展により、村民が携帯電話を使って村の日常生活や黒水チベット族の文化をインターネット上にあげるようになった。羊茸村に到着した観光客からは、「黒水県に来る前には、阿壩州の自然観光と九寨溝・黄龍しか知らなかった、黒水チベット族さえも知らなかった」という声をよくきく¹⁸⁾。黒水県の観光開発を通じて、「黒水チベット族」という民族身分と黒水チベット族の文化は、より多くの観光客に伝わっているのである。チベット族の周縁の存在としての黒水チベット族にとって、観光産業は外部の認知を受ける最も重要な手段である。そして「黒水チベット族」という民族身分は、周辺の羌族とギャロンチベット族と競合しつつ、自分達の開発の権利を確保するための政治的資本である。

4. 観光開発と民族身分の戦略

2000年から実施された西部大開発と2008年に生じた震災からの復興により、四川省の少数民族地域における観光事業は注目を集めた。この二つの開発ブームの中で四川省政府は、特色の

ある民族地域の開発を強調した。その主な内容は、従来の自然資源に負担をかける観光開発が反省され、一般的なマスツーリズムと一線を画したエコツーリズムが新たな理念として、長江上流民族地域の観光開発に導入されたことである（「長江上流民族地区生態経済研究」課題組 2000: 275-276）。民族文化による観光開発の導入と共に、比較的経済発展が遅れている少数民族地域では、より豊かな新たな暮らしを手にするために、自分たちがもつ民族文化を資源にしなければならないという意識が広がった。前節の例にも見られるように、観光産業が急成長を遂げた背景には、経済効果の拡大・発展への期待がある。そのため国家は観光振興に介入するようになった。自然観光地を整備する際に環境への負荷が評価されることと類似して、少数民族の文化観光の整備は「民族問題」と深く関わっている。ひとまず提示された民族文化の「真正性」は問わずに、どのような民族文化が、どのようなアイデンティティをもとに提示されているかを考察してみよう。

4.1 「黒水チベット族」としての観光戦略

2013年の「阿壩自治州十二・五観光計画」によれば、過去の観光開発には四つの欠点が指摘されている。それらは1) 交通環境の整備不足、2) 文化と観光の連携不足、3) 自然観光を単独で扱うなど観光の多元性の不足、4) 観光業の専門的人材の不足（阿壩自治州観光局 2013: 12）である。こうした背景の下、阿壩自治州は同州のチベット族と羌族の文化観光を急速に推進してきた（図5、図6）。まず茂県を羌族文化の中心地に定め、「中国古羌城」、「中国羌族博物館」、羌族文化村などの観光地を開発した。こうして世界自然遺産である観光名所「九寨溝・黄龍」への交通路の途中にある茂県では、羌族文化観光が急激に発展してきた。他方、州政府所在地の馬爾康市では、ギャロンチベット族の住居としてよく保存されている卓克基土司の官邸を中心に、ギャロンチベット族観光村、ギャロンチベット族歴史・文化見学などの観光プロジェクトが進められている。またアムドチベット族に関しては、紅原空港の交通優位性を生かして紅原、壤塘、若爾蓋、

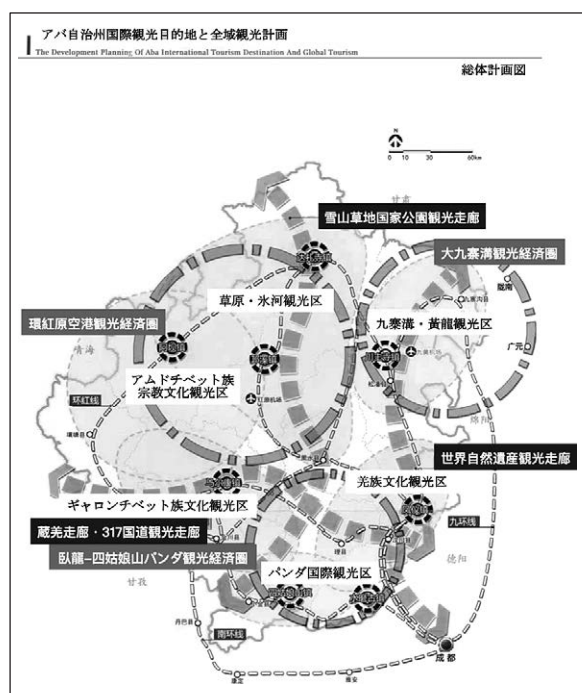


図5 阿壩自治州観光計画図（四川省観光計画設計研究院 2018 をもとに筆者作成）

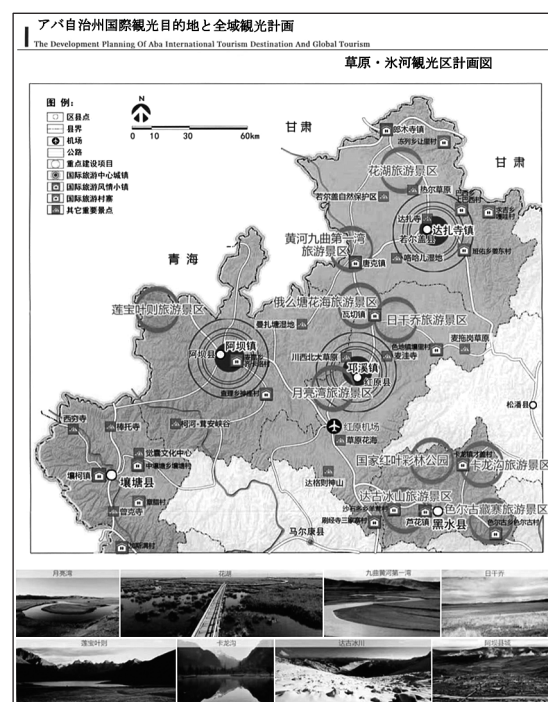


図6 草原・水河観光区計画図（四川省観光計画設計研究院 2018 をもとに筆者作成）

アバ
阿壩という四つのアムドチベット族の県で草原風景とチベット遊牧文化に親しむ観光が人気になっている。

羌族、ギャロンチベット族、アムドチベット族という三つの民族の間に住んでいる黒水チベット族には、歴史上、ギャロンチベット族土司に支配されていたという政治的記憶がある(任建新、何潔 2018: 116)。当地は宗教上、チベット仏教が信仰される最東端(黒水県より東にはチベット仏教の寺が見られない)にあたり、黒水チベット族の間ではチベット仏教の信仰が深い。黒水チベット族が話す言語は茂県の羌族とほとんど同じで、日常会話に支障はない。日常生活における飲食、服装、建築などは、黒水チベット族はギャロンチベット族と高山部の羌族との類似性が高いが、西から東へと向かうにつれチベット文化の程度が弱まる。こうした複雑な文化の狭間にある黒水チベット族は、自らの文化帰属を定義することに対して大きな矛盾に直面すると考えられる。特に中国には膨大な歴史記録があり、漢族の歴史や地方誌、チベット族の宗教記録などの史料が存在する。一方で経済活動による人的交流、資源の競合、紛争などの集団間の動きもある。そのため黒水チベット族のように集団の「境界」が不明確になる実態は、少数民族に限った例外というよりは一般的なものであると思われる。近代国家の「民族」の概念を受容し、急激な開発に直面するなか、上記の矛盾を捉えると、興味深い事実が浮かんでくる。

2020年の現地調査中、当時の黒水県文化観光局の局長であった蘭勇(チベット族、黒水県出身、2013年～2022年在任)に黒水県の観光開発について複数回にわたりインタビューを行った。彼は、「最初に色爾古村をチベット文化観光村として宣伝した際、色爾古村では古い建築がよく保存され、家屋の数も多く、整然とした建築風景が美しかった。我々黒水県もギャロン土司の歴史と文化を有しているのだから、「ギャロンチ

ベット族第一村」という名前を付けたいと思った。しかし馬爾康や金川の真のギャロンチベット族の反対を招くことを考えたら、やはり「ギャロン」を取り去ったほうが良いと判断した¹⁹⁾と言った。そこで現在の羊茸村にも、全ての文化プロジェクトに「黒水チベット族」を付けているという。黒水チベット族らしい民宿、黒水チベット族らしい飲食、黒水チベット族らしい祭り、黒水チベット族らしい舞踏・音楽など、外来の観光客に宣伝する際に、自分たちの独自性を強調しながら「黒水チベット族」という民族身分を創出した。

中国政府の官僚にとって、経済発展の指標を手がかりに、地域間の経済成長を比較したり、観光文化資源の地域的帰属をあいまいに調整したりすることはよくあることである²⁰⁾。しかしながら民族は政治的に敏感な問題であるが故に、少数民族間の対立を防ぐためには、観光文化資源がどの民族に帰属するかを判断することは本来、慎重を要する仕事である。これは政策の優遇や開発の機会と関係し、特定の民族であることは支援を受ける正当性を主張するための重要な武器だと考えられる。例えば「ギャロンチベット族」は、学術的研究と政府文書による承認に基づいて「確定された」言語、歴史、生活地域および民族的アイデンティティを有するチベット族のサブグループである。ギャロンチベット族の観光開発において、民族文化資源は学術的かつ法的な根拠がある。そのために、黒水チベット族の政治のエリートにとっても、他のチベット族と区別される「黒水チベット族」を構築することはきわめて重要である。チベット族のような地域的差異の大きい少数民族にとって、民族識別による民族の分類は、民族内部の差異を十分に反映できない可能性がある。中国の民族政策は各少数民族と漢族との格差を削減する一方で、一民族内部の政治的格差を生んでいると思われる。黒水チベット族のような大きな少数民族の中の小さなサブグループが民族身分を獲

得するためには、観光資源として役立つ文化を保持しているだけでは十分でなく、学術研究による民族の独自性の証明と州や国家の民族政策による承認が必要になる。

黒水県周囲の地域と民族にとって黒水県と黒水チベット族のイメージは、1952年の改革開放前には野蛮人や匪賊のようなものですらあった。解放前には黒水県の人々が隣県で牛馬を盗んだり、黒水県に居住する回族や漢族商人を強奪することがよくあった。1952年に黒水県は共産党に支配されたが、1956年には反乱も発生するなど、何十年間にもわたって共産党政権にとって不安定な地域であった。それに加え2004年まで政治的に閉鎖状態（外国人の進入厳禁、厳格な対外交渉の規制）であった（黒水県地方志編纂委員会 2010）。1978年の改革開放以降、生薬を小売りする黒水チベット族がしばしば偽ものを販売したので、全国的に黒水人は偽生薬販売者と認知されていた。故に、外部からの黒水チベット族への評判は最悪な状況にあった。近年の観光ブームに伴い、四川省外の人々は黒水県を素朴な少数民族の住む美しい場所と認識しているが、省内と自治州内部で黒水県の歴史をよく知る人々にとって黒水チベット族の評判は悪い²¹⁾。

これに対して黒水県の観光地は、黒水県の美しい自然風景を提示するだけでなく、黒水チベット族のイメージを再構築する役割もあるとも言える。

まず、学術研究に関する問題がある。2013年阿壩自治州の建州60周年を契機として、黒水県政治協商会議²²⁾は、黒水県と黒水チベット族に関する歴史文献、研究論文、地元有名人のメモワール、地元の伝説などの文章を収録した二冊の『黒水文史資料』を編集した。しかしながら、この本の編集長が漢族の幹部であったため、黒水県のチベット族の知識人は不満をもったという²³⁾。この本の中には、既存の学術研究に基づいて、黒水チベット族の話す言語を羌語とし、黒水チベット族を羌族と見なす記述すら見られ

る。黒水県のチベット族の知識人は四川省の民族事務部門にこれらの問題を通報したため、黒水県における黒水チベット族に関する政府の文書では、必ず黒水チベット族の言語を黒水話や「黒水チベット語」と表記するように改まった。このようにして、黒水チベット族の言語帰属の問題は、四川省の一つの民族問題になったのである。2016年に四川省民族研究所が実施した「四川省世居少数民族語言文字調査」の成果論文の中でも、黒水チベット族の言語を羌語と記され（王海燕、陳安強 2017: 24-28）、黒水チベット族の知識人はこれに反対した。四川省民族宗教事務委員会の指示により、その後、四川省民族研究所は従来から踏襲してきた黒水チベット族の言語を羌語北部方言とする分類を見直し、すべて「黒水話」と修正した²⁴⁾。黒水チベット族の知識人は言語と民族的アイデンティティの一致を強調しながら、黒水チベット族の文化の独自性を主張しているのである。

次に、文化資源の構築に関する問題を述べる。「黒水卡斯達温」（^{カスダウ}鎧を被る祭りの舞踊）は2006年に第1回国家級無形文化財に指定され、2014年に「黒水阿爾麦民歌」（^{アエルマイ}ポリフォニー民謡）も第4回の国家級無形文化財に指定されている。「黒水阿爾麦民歌」の「阿爾麦」は黒水チベット族の自称であるエマ[əma]の漢字表記であるが、羌族の国家級無形文化財「羌族多声部民歌」（2008年第二回登録）と同じような形式であり、違いは地域による歌詞の内容だけである。ポリフォニー民謡としては、羌族の方が先に「羌族」という漢字表記とともに登録されたことから、黒水チベット族の側は、民族語の漢字表記を使って羌族のそれと区別している。実際、羌族地域の観光開発において、羌族のポリフォニー民謡を歌える人は少ない。したがって、羌族の観光地でそれを歌う歌手の中には黒水県の黒水チベット族の者もいる。2020年の現地調査では、羌族の民謡は黒水チベット族から学んだものであり、さらに羌族の民族文化は偽ものだと言う

黒水チベット族の人もいることが明らかになった。

このような黒水チベット族を中心とする民族間の文化的混在性と類似性により、現在の観光開発では、民族身分や民族帰属は重要な政治的意味をもつ。黒水チベット族のエリートにとって、「黒水人」と名乗ることは、単なるチベット族としての地域的特殊性をもつことを意味し、政治的正当性が不十分である。そして、前述した通り、歴史的に四川省の民族地域では、黒水人に対する隣接地域の住民からの評価はあまり好ましいものではなかった。同じ批判であっても、「黒水人」への批判の場合は、せいぜい地域的な偏見としてそれほど大きな問題にはならないが、「黒水チベット族」という民族への批判となれば、少数民族差別という深刻な政治問題になる可能性がある。これは中国における「少数民族」という地位に伴う問題であり、少数民族たちはこの政治的手段の活用にも熟練していると思われる。中国の少数民族の民族意識を考える際に留意すべきなのは、観光化によって民族意識が維持、強化されているだけでなく、少数民族エリートたちが政治的イデオロギーに基づいて民族意識を創造していることである。いわゆる少数民族の「脱政治化」論は、少数民族の側の政治的ロジックを無視することであると考えられ、むしろ観光開発などの現実的課題に着目することで、少数民族の政治的関心を読み取ることができると言える。

4.2 「国民統合」としての黒水県の紅色観光

黒水チベット族のエリートが少数民族の地位と独自の歴史文化を強調する一方、現在の黒水県における観光開発の過程を見れば、各レベルの政府が少数民族を中国国民や「中華民族」に「統合する」関心をもっていることは明らかである。2000年の西部大開発以来、市場経済の発展を通して少数民族の間に国民としての一体感を高める試みは止まっていない。中国における少数民

族の国民意識の強化は、国家にとって国家領土保全、少数民族地域における資源開発の正当性、社会的安定という意味を持ち、上から下へのイデオロギーによる「強制的」同化・統合であるとされている（西村 1991, 1993; 加々美 1992, 2008; 毛里 1998）。中国共産党の革命史跡への巡礼である「紅色観光」が少数民族地域で実施される場合、少数民族に主体民族（漢族）の歴史と国民意識を強制する、イデオロギー色の濃い行為というイメージが浮かぶかもしれない。しかし、具体的な状況と少数民族の側に視点を移せば、解釈は違うものとなると思われる。

1934年10月から1936年10月まで中国共産党の紅軍は中国国民党の囲剿（包圍戦）から逃れるため、江西省から西南部の貴州省、雲南省、四川省を經由して陝西省の北部に転戦した。これを長征という。中国共産党の歴史において、長征は中国の半分の土地に革命の種を播く栄光ある事業で、後に政権を奪取する基盤となったと宣伝されている。確かに長征は中国共産党が初めて少数民族と対面する機会となった。共産党の劉伯承^{リュウボチエン} 将軍と彝族の頭領小葉丹^{シャウエイダン}が彝族の風俗に従い血を^{スス}飲^スて同盟したことは、長征の逸話として知られており、共産党と少数民族の団結の象徴になっている。

それほど有名な話ではないが、長征において紅軍が一番長く滞在したのは黒水県だとされている。1935年6月から1936年8月まで共産党と四方面軍が3回にわたって黒水県を訪れた。共産党は長征中の困難な状況を「爬雪山過草地」（雪山に登り、草原の沼地を通る）と表現しているが、登った五つの雪山の内、三つ（雅克夏^{ヤケシャ}4443m、昌^{ツァン}徳山^デ4283m、達古山^{ダグ}4752m）が黒水県にある。羊茸村の最高地点は昌徳山である。そして、黒水県に滞在していた際に、紅軍は710万斤（305万kg）の食糧、3万頭の家畜、約一万斤の動物油、多くの動物毛皮を調達し（銀円や借用書でチベット族から購入）、約5000斤の塩（岩塩）を生産していた（黒水県地方志編纂委員 1993: 31）。これ



写真3 「蘆花会議会址」(筆者撮影 2021年11月)

は黒水チベット族が共産党の長征に莫大な貢献をしたことを示唆する。黒水県東部の瓦鉢郷には紅軍が黒水チベット族村民から借りた食糧に関する碑文の刻字が現在も残されている。最後に、黒水蘆花の土司頭人「沢旺^{ゼワン}」の家で共産党の歴史でも有名な「蘆花会議」が開かれ、長征後期の張国焘の指導権問題を検討した。毛沢東などの共産党の領袖が住み、「蘆花会議」の旧址として、土司頭人「沢旺」の家は「蘆花会議会址」(写真3)という名で2006年に「全国重点文物保护单位」に指定された。現在は黒水県の紅色観光の看板が設置されている。

紅色観光は、一般には共産党の歴史を理解し、愛国精神を涵養する旅と理解されている。黒水県のような少数民族地域において急速に発展している紅色観光の目的は、民族団結や少数民族と共産党の歴史を学ぶことにある。そしてそれは経済支援と投資を通じて少数民族地域の観光開発を推進する新たな手段でもある。中央政府の『2016～2020全国紅色観光開発計画綱要』と四川省の『2016～2020紅色観光開発計画の実施意見』の政策のもと、長征史跡が多い阿壩自治

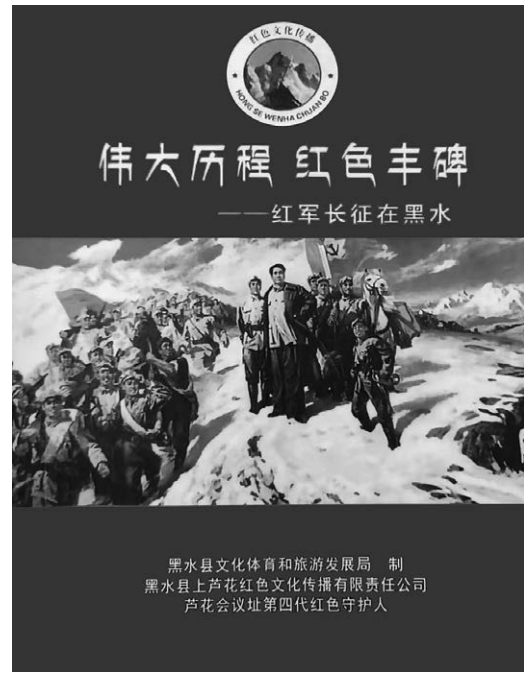


写真4 『紅軍長征在黑水』(筆者撮影 2021年11月)

州は2018年に『阿壩州紅色観光開発計画』を制定し、黒水県も「蘆花会議会址」と「雪山紅色文化」を中心に紅色観光を進めている。

政策上の優遇と経済発展により国民統合が目指される一方で、黒水チベット族側の対応を見れば、別の意味があることがわかる。公的に「紅色観光村落」に指定されていない羊茸村は、紅色観光村である昌徳村と競合関係にある。例えば、紅軍滞在に関する歴史では、羊茸村は自分の村がより多くの紅軍を受け入れたと観光客に宣伝する²⁵⁾。しかし、歴史文献によれば(黒水県地方志編纂委員会 1993: 11-12)、この二つの村のいずれも紅軍の滞在期間は短く、当時の二村の規模を考慮すれば、それほど大勢の紅軍を迎えることはできなかったはずである。共産党の紅軍と革命言説を受容することは、単なる中国国民や中華民族としてのアイデンティティの強化ではなく、一つの少数民族である黒水チベット族として国家の統合的な歴史記憶へ参与するという面もあると考えられる。

この点は、「蘆花会議会址」の観光開発から明らかになる。「蘆花会議会址」は黒水県の紅色観

光の看板として、通常の歴史記録に載っている黒水県の唯一の史跡である。1935年7月10日、毛沢東が指揮する一方面軍は黒水県の西から蘆花鎮に到達した。最初、紅軍が何者かが分かっていた土司頭人の沢旺は、家の家畜と食糧を紅軍に勝手に取られることに恐れつつ家族を連れて山に潜んでいた。紅軍に「チベット同胞、お帰りなさい、我々はあなたたちの兄弟、チベット同胞を傷つせず、あなたたちを救う軍隊です」と説得された沢旺は、家に戻り、紅軍に食糧を提供することと共産党の政策を了承した。そして自家の食糧と家畜を紅軍に与えるだけでなく、紅軍を連れて他の農家を訪ね、食糧を乞うた。紅軍が黒水を去った後の数年間、沢旺は自家の食糧で他の農家から供出した分を返済したという（彭初 2019: 53-64）。

1952年の黒水県の解放に伴い、沢旺は歴史的貢献をした少数民族の土司頭人として、少数民族関係の仕事を得、積極的に黒水チベット族の民族識別と黒水県人民政府の創立に参加しており、彼の息子王札も当時の黒水県政協の常務委員を勤めていた。ところが1957年の「反右運動」により、封建主義の代表とみなされた沢旺は、労働改造（政治問題のある受刑者）の対象になり、家屋の部屋は村の幾つかの農家に分配された。1978年以降、共産党が集団化時期の政治運動を見直したため、沢旺の名誉は回復され、元の家屋も沢旺の孫に返却された。2006年に沢旺の古い家屋は蘆花会議会址として「全国重点文物保护单位」（毎年政府から補助金を得て、保存される文化財）に指定され、軍隊から退役した沢旺の曾孫彭初が家屋の管理を任されている。2010年には震災復旧のための支援金を県政府から受け、被災した家屋を修繕した。以前は主に各地の政府から政治活動の一環として見学者が来ただけだったが、黒水県の観光事業の発展により一般の観光客も増えてきた²⁶⁾。これまで黒水県における長征の歴史と黒水チベット族土司頭人としての歴史を観光客に解説できるように、

彭初は歴史書を大量に購入し、共産党の革命史と黒水チベット族の歴史を独学した。そして遂には自分の研究書も出版した（写真4）。共産党の高級幹部から長征史の研究者までが蘆花会議会址に行って彭初の説明を聞くようになった。このような家族の歴史を筆者に語った彭初は、「蘆花会議会址は全国でも唯一の私有の紅色史跡ですから、全ての仕事は私一人に任せられていて、とても大変です。しかし私の家は先人から私まで共産党に勤めているので、これは私の責任と運命かもしれません。」²⁷⁾と言う。黒水チベット族として、土司の子孫という身分が彭初の誇りである。そして、紅色観光の従事者として、共産党に関する「正確な歴史」を全ての観光客に伝えている。

改革開放前の沢旺から現在の彭初までの経歴には、中国政府と黒水チベット族の関係の変化が読み取れる。文化上の他者から少数民族としての地位の獲得（政治上の他者）へ、政治運動に巻き込まれ（社会主義民族への同化）、名誉の回復（政治上の他者への回帰）を経て、経済的開発への参加（地位の再構築）まで、黒水チベット族は国家の政治、経済的変動に応じて異なる意味をもってきた。この変化はほぼ黒水チベット族が国民国家に編入された過程と違ってよく、一見、少数民族に対して外部から投影されたステレオタイプなイメージの連なりのようにも感じられる。しかし彭初の語りには、その変化を受け止める生身の人間の感情が表れている。

まず共産党の革命史にとって重要な長征に黒水チベット族として沢旺が貢献したことと、1952年以降に漢語の話せる土司頭人として沢旺が黒水人の民族識別など解放初期の民族政策に重要な役割をはたしたことは、彭初の誇りの源である。また現在の紅色観光の推進は政府の経済支援というよりはむしろ先祖の受けた処遇に対する償いと感じられるようである。そして彭初は責任感をもって、漢族の学者たちに黒水チベット族と長征に関する「正確な歴史」を講演

し続けている。

このように紅色観光は少数民族地域に対するイデオロギー統合の手段であると言える。しかしながら、彭初のような少数民族のエリートにとっては、イデオロギー統合とは、自身の政治的理性をもつことを意味する。政治的理性とは、政治的地位や経済的利益を確保するために中華民族の一員としての自覚をもって、自分流の中華民族としての語りを創ることから得られる。国家レベルのイデオロギーが強まりつつある現在、少数民族側の紅色観光への思いに留意することは、きわめて重要だと言える。

5. 結論

本論では、チベット族のサブグループとしての「黒水人」が、民族文化観光の開発を契機に、いかに「黒水チベット族」という民族身分を構築してきたかを検討した。この過程において、黒水チベット族の知識人エリートと政府の官僚は重要な役割をはたしている。黒水チベット族の民族身分と言語学の齟齬あるいは羌族との文化資源の帰属問題などは、漢語の知識に乏しくチベット文字も知らない一般の人々にとって、大きな関心ごとではないだろう。

観光開発において「黒水チベット族」を戦略的に用いる理由は、第一に少数民族として開発政策や経済優遇を得るための政治的正当性を確保することである。第二に、周囲の少数民族との競合関係において、民族文化資源を利用する正当性と帰属の「真正性」を強調することである。そして第三に、黒水チベット族を強調しながら、国民の一員として自主的に国家統合の歴史とイデオロギーへ参入し、新たに構築する意図を強調することである。

中国における「民族」という言葉は、歴史の経過とイデオロギーの変動により、常に、統一された国民国家という目標と多民族国家という現実の間で揺らいできた(王 2006)。外部からは、少数民族は常に受動的にこれらの歴史に耐えて

いるように見えるが、少数民族自身にとってはそう単純ではない。Scottの『Weapons of the Weak』という概念のように、少数民族という身分は「弱者の武器」と言えるかもしれない。中国の漢族の中には「会哭的孩子有奶吃」(泣く赤ちゃんには母乳が与えられる)ということわざで少数民族への優遇政策に不満を表す者もいる。即ち、少数民族に何か事件が生じたら、民族問題化を避けるために、優遇政策が与えられるという事実がある。この優遇政策は1980年代からの経済発展の背景で、漢族地域と少数民族地域との経済格差を是正する目的で誕生したものである。その結果、一部に経済発展はもたらされたが、かえって少数民族内部での地域間格差が目立ち始めている。しかしながら、「弱者の武器」としての民族身分を活用し、政府に公然と反抗して民族問題を起こすことは極めて少ない。「弱者の武器」は、国家のイデオロギー側に参与する大部分の少数民族エリートにとって政治の現実に対応する戦略であるかもしれない。

黒水チベット族にとって、チベット族としてのアイデンティティは明確であるが、チベット族それ自体も多様なので、「民族」を研究単位にすると黒水チベット族という周辺存在は無視されてしまう可能性がある。チベット族のサブグループとして黒水チベット族という民族身分を戦略的に表明することは、単にラサ(チベット族の主流文化)風のチベットの歴史、宗教、文化などの受容を意味するのではなく、自己集団の統合、地域の歴史の解釈、周辺民族との関係などさまざまな課題への対応策と考えるべきなのである。民族はそうした問題解決の手段であるが、目的ではない。

2020年から2021年までの筆者の現地調査の時期は、ちょうどコロナ禍の渦中であった。観光開発に取り組む羊茸村や黒水県の他の観光地にとって、観光客の減少や不在は、甚大な危機を意味する。実は観光事業は人間の生命周期の生老病死のように基本的には永続しないものかも

しれない。「観光民族」になった黒水チベット族は、観光の危機に対して、どのような生業を選択するだろうか。かつてのような地域の自然と文化に従う柔軟な生業選択に戻れるだろうか。黒水チベット族に関する研究は少ないが、その一方で、黒水チベット族のような複雑な歴史と文化を持つ少数民族は他にもいる。今後の課題は、それらの少数民族に固有の開発状況を踏まえつつ、より幅広い比較研究を行い、中国少数民族の現状を理論的に提示することであろう。

謝辞

この調査及び研究を実施するにあたり、2019年度総合研究大学院地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生派遣事業、2020年度日本学術振興会特別研究員（JSPS KAKENHI Grant Number 20J11453）による研究遂行助成を受けた。本稿の査読の担当にあられた2名の査読者から大変丁寧かつ有益なご指導とご助言をいただいた。鈴木紀先生と卯田宗平先生、そして南真木人先生は、本稿の初稿から最後の完成まで丁寧に指導くださり、常日頃から助言と励ましをいただいている。国立民族博物館の星野麗子さんには本稿の日本語のチェックをお願いした。以上、ここに上げた方をはじめ、調査地の羊茸村、調査ガイド斯達頂さん、黒水県文化体育和旅遊發展局局長蘭勇さん、蘆花会議会址の彭初さんなどお世話になった全ての方々に心からお礼を申し上げます。

注

- 1) 「貧困」ラインは、2011年11月の中央貧困扶助開発会議で、2010年の1人当たり年間純収入である2,300元に設定された。毎年の物価変動を考慮すると、2020年の同基準は約4,000元に相当する（中国国家統計局 2020）。
- 2) 「中華民族共同体意識を築く」は、習近平の社会主義新時期における民族関係に関する最重要な発言であり、2014年以降、中国少数民族政策の基本方針になった。その内容は：①中国共産

- 党が少数民族政策を集中的に指導すること、②愛国主義を樹立すること、③各民族の社会主義を現代化すること、④各民族の融和を通じて中華民族を自覚すること、⑤法的平等、⑥民族領域の重大なリスクを防ぐこと、という6点である。
- 3) 民族識別とは、民族政策を平等に実施するために、1950年から中国共産党中央が民族学研究部に委託して、少数民族地域で実施してきた国勢調査である。民族識別の根拠として、当初、スターリンの共同地域、共同経済生活、共同言語、共同文化という四つの基準を用いたが、少数民族の状況に適さないことがよくあった。その後、民族呼称、民族起源、歴史、少数民族自身の意志などについて、少数民族地域で聞き取りや座談会の形式で調査するようになった。（施聯珠 2014年インタビューの記録による。中央民族大学博物館 2018: 27-29）。
- 4) 土司制度は、元の時代から中央王朝が周辺の各民族を間接的に管理する制度であった。土司は各少数民族の首長に軍事指揮官の称号を授与するものに対する総称である。土司は少数民族出身の世襲のリーダーであり、中央王朝の印鑑と勅封を受けて自己の地域を管理する者である。本稿における黒水県のギャロン土司は清朝雍正元年（1723年）以来、「梭磨宣慰司」という役職を担う。土司の駐在地は、現在の阿壩自治州の馬爾康市梭磨郷で、現在の紅原県、阿壩県、黒水県、馬爾康市及び青海ゴロク州の一部地域を管轄していた。1913年最後の土司であった鄧登・班瑪仁真が亡くなったことより、土司の下位地位である頭人が土司の権力を求めて数十年におよぶ抗争を展開した。1940年代から、黒水の頭人蘇永和が黒水全域を統一して、実際の梭磨土司の管轄権を手に入れた。
- 5) 「藏羌彝走廊」とは、中国の人類学者の費孝通が残した「藏彝走廊」という歴史、民族、文化に関する地域研究の概念に「羌」という羌語群の諸民族を加え拡大した改良版である（張 2012, 2015）。そもそも「藏彝走廊」というのは、四川省の東に漢族とイ族、西にチベット族という民族が接触する接点のことを指し、歴史上、さまざまな民族が移動を重ねてきた民族の十字路のようなところである。李紹明（2005, 2006）によれば費孝通が唱えた「藏彝走廊」とは、費が中国民族の多元的な状況を理解するために使った概念で、中国を北部草原、東北部高山森林、西南部青藏高原、雲貴高原、沿海、中原の6地域と周辺部を縦断する藏彝、西北民族、南嶺の3つの

走廊（回廊）から形成されると考えるとわかりやすいと唱えたものである。藏彝走廊とはこうした6つの中国の周辺部の一つであり、そこに住む民族の流動性や歴史経験の類似性、文化的同一性を指摘したものである。「藏羌彝走廊」の地域的範囲は四川、雲南、西藏の三省が接する山脈部と高山峡谷部からなる山脈を横断する区域をさす。詳しくは岷江、大渡河、雅礮江、金沙江、瀾滄江、怒江の六江流域の範囲である。これがチベット・ビルマ語族の民族たちの縦の移動経路となり、複雑な自然環境の中で、歴史的に相互に交流する民族間関係が形成された。

- 6) ギャロンチベット族とはチベット族のサブグループの一つであり、四川省の阿壩藏族羌族自治州と甘孜藏族自治州の高山部に住んでいる。言語はギャロン語で、羌語群に属す。「ギャロン」はチベット語の他称である。チベット語において、「ギャロン」は東の山の谷の地域を意味する。チベット語の文献と漢語の歴史にもギャロンチベット族に関する詳細な記録がある。言語学において、チベット系の学者は常にギャロン語を通して古いチベット語から近代チベット語の変化が分かると指摘する。歴史学と民族学において、ギャロンチベット族における元明清の土司制度と土司文化は今もチベット族研究における不可欠な存在である。歴史上、黒水チベット族はギャロンチベット土司の管轄下にあったため、黒水チベット族の文化はギャロンチベット族の影響を受けてきたと考えることができる。（曾2018）
- 7) 黒水チベット族のエリートたちの異議は、現地での聞き取りによる。
- 8) 措曲は黒水川のチベット語の漢字表記である。チベット語で「措」は黒いを、「曲」は川を意味する。このような漢字表記は、現在のチベット地域の漢字地名でもよく見られる。チベット語の文献において、現在の黒水県の範囲を措曲と表現することもある。
- 9) 注4を参照。
- 10) 「黒猫白猫論」は、鄧小平が1962年に農業発展問題を論じた際に、「黒猫白猫，只要捉住老鼠就是好猫」（黒猫であるかや白猫であるかに関わらず、ネズミが捕まえたほうがいい猫である）という四川の諺を引用したものである。文化大革命期に、鄧小平はこの発言で批判された。改革開放以降、鄧小平の「黒猫白猫論」は市場経済を發展させる中国の重要な理論になった。すなわち、社会主義でも資本主義の手段でも社会主

義を發展できることをいう。

- 11) 「阿壩自治州十二・五観光計画」は中国の計画経済の名残である。中国では、1953年の「第一次五カ年計画」から5年ごとに全国的な経済計画を立案してきた。地方では全国の計画に従い、その地方の総合的な計画を立案する。「阿壩自治州十二・五観光計画」は、当時の阿壩自治州観光局が立案した2013年から2018年までの観光産業に関する開発計画である。
- 12) シャンション（象雄）とは、紀元前から唐貞観19年（645年）まで西チベットのカイラス山麓一帯に存在した国である。後に吐蕃に合併された。現在の研究では、ボン教の發祥地とみなされ、チベット文化の源とも言える。
- 13) 「黒水話」とは黒水チベット族の話す言語を意味する。学術上、黒水県の言語が羌語北部方言に分類されたことに対して、黒水チベット族のエリートは反発した。彼らは自分の話す言語はチベット語だと信じているが、学術的証拠がないので、中立的な表現である「黒水話」を用いている。
- 14) 咂酒とは、チンクー麦や小麦で作る発酵酒である。チンクー麦を釜で煮て、^{フルイ}篩で十分に冷やした後に酒薬を混ぜて、釜に入れて麦藁と布団で密封する。一週間あまり発酵させた後、甕に入れて泥で甕口を密封してさらに一カ月以上発酵させる。黒水チベット族はジメシ[zɕmæʃi]と呼ぶ。現在は日常の飲料として大量に消費する一方、年中行事と冠婚葬祭において、不可欠な儀礼食品でもある。
- 15) 祭祀塔とは、黒水チベット族がレクシ[lækʰɕi]（東部の方言）やレチュ [lætɕe]（西部の方言）と呼び、普通は山頂に石を塔のように積むものである。祭祀塔で穀物と柏の枝を焼いて山神に奉納することを漢語で「煨桑」^{ウイサン}と言う。家屋の祭祀塔もレクシやレツェと呼び、毎朝、穀物と柏枝を焼くことから、一日の始めを表す。現在では、経済力の向上に伴い、村々は煉瓦で建築するチベット式の仏塔を村の入り口に設置することが多い。その仏塔もレクシやレツェと呼ばれる（2020年の現地調査による）。
- 16) 羊茸村の民宿に関する記録は、2020年の現地調査時に三郎俄木を中心とする聞き取り調査から得た。
- 17) 羊茸村の村民は民宿の経営以外に、年中行事の際に、村の広場の祭祀塔でジメシ（地元の発酵酒、注14参照）の開壇（ジメシのつばを初めにあける）儀礼を行い、観光客を誘ってジメシ

- を試飲させ、黒水チベット族の祭祀文化を体験させる。この祭祀は観光のための演出ではなく、定まった日時に開催するものである。2020年の現地調査では、8月の転山会の祭りに参加した。
- 18) 観光客の声は、2020年の羊茸村における聞き取り調査から得た。
- 19) 蘭勇 (50代) の口述、2020年7月現地調査による。
- 20) 中国における地域間の観光資源の競争は、主に歴史上、記録不明の有名地と名人の故里をめぐって展開する。例えば、史書に記載される「夜郎」(漢朝に中国西南部にある小さい国) 国の主体は、周知のように歴史上、大体今の中国の貴州省にあったと推定されるが、湖南省、雲南省などの6の省市が「夜郎」の帰属問題をめぐって観光資源の競争を展開していった。実は「夜郎」の実際の位置は確実な証拠がないので、中央政府はほとんど経済的な問題として取り扱っている(王 2005)。
- 21) 2010年、2014年、2019年、2020年の現地調査により。
- 22) 政治協商会議は、中国共産党が指導する各民主党派、各団体、各界の代表で構成される全国統一戦線組織である。各級の政治協商会議の委員会は、専門の文化・歴史の研究部がある。研究部の業務は各級政府の所在地の少数民族、地域の有名人の回顧録、地域の伝説あるいは物語などの歴史・文化を収集・整理することである。
- 23) 2020年の現地調査の語りによる。
- 24) 2019年王海燕からの聞き取りによる。
- 25) 2020年の現地調査による。
- 26) 1952年以降の蘆花会議会址のことについて、2020年の彭初(40代、蘆花会議会址四代目の管理者)からの聞き取りによる。
- 27) 彭初の口述、2021年12月の現地調査による。

参考文献

日本語

- 王柯
2006 『20世紀中国の国家建設と「民族」』 東京大学出版会。
- 岡 正雄・江上波夫・井上幸治(編)
1991 『民族の世界史1—民族とは何か』 山川出版社。
- 加々美光行
1992 『知られざる祈り—中国の民族問題』 新評論。
- 2008 『中国の民族問題—危機の本質』 岩波書

店。

- 松岡正子
2000 『中国青藏高原東部の少数民族—チャン族と四川チベット族』 ゆまに書房。
- 2015 「四川チベット族諸集団の研究」『愛知大学国際問題研究所紀要』 146: 169–187。
- 2017 『青蔵高原東部のチャン族とチベット族—2008汶川地震後の再建と開発【論文篇】』 あるむ。
- 西村成雄
1991 『中国ナショナリズムと民主主義』 研文出版社。
- 1993 「二十世紀中国を通底する『国民国家の論理』とナショナリズム・社会主義」『歴史評論』 513: 3–22。
- 毛里和子
1998 『周縁からの中国—民族問題と国家』 東京大学出版会。

英語

Gardner, Bovington

- 2014 “Hu wants something new: Discourse and the deep structure of minzu policies in China.” Susan, H. Williams (ed.), *Social Difference and Constitutionalism in Pan-Asia*, pp. 165–192, Cambridge University Press.

Heberer, Thomas

- 1989 *China and Its National Minorities: Autonomy or Assimilation?* Armonk: M. E. Sharp.

中国語 (ピンイン順)

阿壩藏族羌族自治州旅遊局

- 2013 『阿壩藏族羌族自治州旅遊業發展十二・五規劃』。

阿壩藏族羌族自治州人民政府

- 2021 『阿壩藏族羌族自治州国民經濟和社会發展第十四个五年劃划和二〇三五年遠景目標綱要』。

辺政設計委員会(編)

- 1940 『川康辺政資料輯要・理番汶川』。

常安

- 2018 「習近平中華民族共同体建設思想研究」『馬克思主義研究』 1: 36–47。

- 「長江上流民族地区生態經濟研究」課題組
2000 「長江上流民族地区生態經濟研究」任傑(編)『中国西部概覽·四川』民族出版社。
- 費孝通
1980 「關於中国民族的識別問題」『中国社会科学』第1期、pp. 147-162。
1989 『中華民族多元一体格局』中央民族大學出版社。
1998 「民族研究—簡述我的民族研究經歷和思考」『国立民族学博物館調查報告』8: 207-218。
- 郭林祥
1992 『「陸上台湾」覆滅記—黑水芦花剿匪紀實』江蘇文芸出版社。
- 郝瑞 (Steven Harrell)
2002 「再談“民族”与“族群”—回應李紹明教授」『民族研究』第6期、pp. 36-40。
- 郝時遠
2012a 「評“第二代民族政策說”的理論与实践誤区」『新疆社会科学』2: 44-62。
2012b 「美国是中国解決民族問題的榜樣嗎？—評“第二代民族政策”的國際經驗教訓說」『世界民族』2: 1-15。
2012b 「巴西能為中国民族事務提供什么經驗？—再評“第二代民族政策的國際經驗教訓說」『西北民族大学學報(哲学社会科学版)』4: 1-11。
2012d 「印度构建国家民族的經驗不值得中国學習—統評“第二代民族政策”的國際經驗教訓說」『中南民族大学學報(人文社会科学版)』32(6): 1-12。
- 黑水県地方志編纂委員会(編)
1993 『黑水県志』北京: 民族出版社。
2010 『黑水県志1989-2005』方志出版社。
- 黑水県人民政府
2020 「2019年黑水人民政府工作報告」内部印刷。
2022 「2021年黑水人民政府工作報告」内部印刷。
- 黑水県史志編纂委員会(編)
2014 『黑水年鑑2014』電子科技大学出版社。
- 胡鞍鋼·胡聯合
2011 「第二代民族政策—促進民族交融一体和繁荣一体」『新疆師範大學學報(哲学社会科学版)』32(5): 1-12。
- 李安宅·于式玉
2002 『李安宅—于式玉藏学文論選』中国藏学出版社。
- 李錦
2012 「人神分界和僧俗分類—家屋空間的上下秩序(对雅安市宝興县碓磑藏族鄉的田野調查)」『西南民族大学學報(人文社会科学版)』33(8): 11-16。
- 李紹明
2006 「費孝通論藏彝走廊」『西藏民族学院學報·哲学社会科学版』第1期、pp. 1-7。
2007 「藏彝走廊研究中的幾個問題」『西南民族大学學報(人文社会科学版)』1: 14-16。
- 刘光坤
1998 『麻窩羌語研究』成都: 四川民族出版社。
- 林耀華
1982 「中国西南地区的民族識別」『雲南社会科学』第2期、pp. 1-5。
2000 『从書齋到田野』北京: 中央民族大学出版社。
- 馬戎
2004 「理解民族关系的新思路—少数族群問題的“去政治化”」『北京大學學報(哲学社会科学版)』41(6): 122-133。
2012 「如何認識“民族”和“中華民族”—回顧1939年关于“中華民族是一个”的討論」『民族社会学研究通訊』第122期、pp. 1-13。
- 彭初
2019 『紅軍長征在黑水』黑水県文化体育和旅遊發展局。
- 任建新·何潔
2018 『四川藏区史·政治卷』四川人民出版社。
- 四川省觀光計画設計研究院
2018 『阿壩州國際旅遊目的地及全域旅遊發展規劃』阿壩藏族羌族自治州旅遊局。
2018 『阿壩州紅色旅遊發展規劃』阿壩藏族羌族自治州旅遊局。
- 王大良
2005 「夜郎之爭与文化資源開發」『貴州民族研究』5: 115-120。
- 王海燕·陳安強
2017 「四川羌族語言文字应用調查研究」『阿壩師範學院學報』34(2): 24-28。
- 王明珂
2008 『羌在漢藏之間—川西羌族的歷史人類学研究』中華書局。
- 王双懷
2014 『中国西部开发史研究』人民出版社。
- 翁乃群
2014 「国家語境下的“民族”認同与地方語境下

- 的“族群”認同—以藏彝走廊為例」韓敏·末成道男（編）『中国社会的家族·民族·国家的話語及其動態』国立民族学博物館。
- 巫達
2005 「爾蘇語言文字與爾蘇人的族群認同」『中央民族大学学報（哲学社会科学版）』第6期、pp. 133-139。
- 西南民族大学西南民族研究院（編）
2008 『川西北藏族羌族社会調查』民族出版社。
- 張海洋
2011 「漢語“民族”的語境中性与皮格馬利翁效应—馬戎教授“21世紀的中国是否存在国家分裂的風險”述評」『思想戰線』4: 23-25。
- 張曦
2012 「藏羌彝走廊的研究路径」『西北民族研究』第3期、pp. 188-197。
- 2015 「地域研究—外部認知与主体性強調（以藏羌彝走廊為例）」『民族学刊』6(1): 15-32, 103-108。
- 詹姆斯 C. 斯科特 (Scott, James C.)
2007 『弱者的武器—農民反抗的日常形式』鄭廣懷·張敏·何江穗（訳）、訳林出版社。
- 曾現江
2018 『清中葉至民国嘉絨地方—社会文化与族群』人民出版社。
- 中国国家统计局
2020 「脱貧攻艱戰取得全面勝利 脱貧地区農民生活持續改善」http://www.stats.gov.cn/tjsj/sjjd/202210/t20221011_1889094.html
- 2021 「分民族、性別的人口数」『中国統計年鑑 2021』<http://www.stats.gov.cn/tjsj/ndsj/2021/indexch.htm>
- 政協第十四屆黑水県委員会（編）
2013 『黑水文史選輯之一—历史文化集輯』。
- 中央民族大学博物館（編）
2018 『中国少数民族社会歷史調查（上）訪談录』学苑出版社。
- 2022年9月30日 受付
2022年12月7日 採択決定